

---

# オイタナジー

安菜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オイタナジー

### 【Nコード】

N2825H

### 【作者名】

安菜

### 【あらすじ】

オガーデリック。デルーストーム。二つの力は反発し合う闇と光であった。それらの力を求めた天・魅鈴・莉玖は、それぞれの目的を達する為に旅にでた。元中学三年生の冒険・恋愛・戦闘有りのファンタジー小説。

## プロローグ（前書き）

グロテスクな表現を含む場合がありますので、ご注意ください。  
尚、これを読まれて不快な気持ちになられたとしても、私は責任を負いかねますのでご了承ください。

## プロローグ

もう駄目だ。

諦めた瞬間、私の中の何かが切れた。ぶつん、と音を立てて、ばらばらと崩れ落ちて。

諦めた瞬間、何もかもがどうでもよくなった。口から漏れる嗚咽も、ただ呼吸と同じくらいに慣れてしまった。

目から溢れる液体の名前なんて、もう忘れてしまった。口元が歪んで、顔に浮かんだその表情の名も、忘れてしまった。

もう、すべて、どうでもいい。

脱力、

(壊れてしまえばいい。)

## 第一話（前書き）

グロテスクな描写が入ります。

## 第一話

彼女、芹崎天せりきあまは、ぼんやりと空を眺めていた。

ゆつたりと優雅に空に浮かぶくすんだ雲、すんだ青、日に陰る鳥。

それらをすべて瞳に写し、彼女は教師の言葉すら耳に入れない。

脳内でそれを理解することも無く、そのまま抜けていく教師の言葉。彼女は、それを必要とはしなかった。

(面倒臭い。)

気力をなくしてしまった。

それが、今の彼女には、ぴったりだろうか。空を眺める彼女の瞳には光は宿ってはいない。ただただ、鏡のように映すだけだ。

さらりと風に揺れる彼女の黒い髪が、肩口でもどかしいゆるいカーブを描く。

彼女の髪は癖がついていて、それが、天は少し嫌いだった。

ひとつひとつの顔のパーツは整ってはいるが、鼻が何故か低い。すん、と少し不機嫌気味に息を吸えば、気力の抜けた彼女の瞳は、寂しげに揺れた。

「天、芹崎天さん、」

「・・・はい。」

名を呼ばれ、特に目立った反応を示さずそちらを向く天。

教師は、その天の態度に一瞬眉を寄せたが、すぐに言葉を続けた。

「次、読んでください。」

「次、ってどこですか。」

「っー」

天の、悪びれないその声と言葉に、かつと瞳を怒りで吊り上げる。それでも怒鳴り散らさなかったのは、彼女の“就職”という大人の事情が、鎖のように絡まっているからだろう。

深呼吸をして、気を落ち着かせ、教師は天に言い聞かせるようにして口を開いた。

「天さん。今は授業中よ？もう直ぐ受験なのだから、しっかり勉強しなくては駄目。」

「そうですか。」

「・・・っ、先生に向かって、そんな言葉はどうかと思うわ。」

「すみませんでした。」

教師に一つも目を向けず、感情のこもらない言葉をただつらつら述べる。

面倒臭い、とでも言うような彼女の声色に、教師は本当に怒鳴りかけたが、謝罪の言葉を聞いた瞬間に、諦めたように溜め息をついた。

「読んで頂戴。」

「教科書を忘れました。」

「・・・・・・・・。」

淡々と述べる。

これには、もう眉を寄せるしかなかった。

教師は、天から目を外し、彼女からだいぶ離れた場所に座る生徒の名を指す。

彼女の変わりに、文章を読ませる為だろう。

指された生徒は、一瞬嫌そうに顔を歪めたが、文句を言う事無く其れを読み始めた。

「・・・天、今日機嫌悪いね？・・・どうかした？」

ふと、天の後ろに座っていた少女　名を近藤魅鈴こんでいみすずという　が、  
天にそう言葉を投げる。

勿論、怒鳴りはしないが口が煩いと評判の教師には見つからないように、小声で。

魅鈴は、大きな垂れ目に天より少し身長が高かったが、その仕草や物言い、物腰がどこか可愛らしく、少なからず男子に人気があった。心配そうに、恐る恐るといったように天を見つめる魅鈴。天は、冷やかな瞳で其れを見つめ返した。

「別に。なんでもないけど。」

「なんでもないの？本当に？」

何時もとは明らかに違う彼女の態度に、魅鈴は戸惑いながらも一度問うた。

はあ、とあからさまな溜め息をついた天は、眼光鋭く魅鈴を睨むと、一言呟いた。

「なんでもないから。」

「っ」

彼女の言葉に、悲しそうに顔を俯かせる魅鈴。

だが、天はそれに心を痛める事無く、何事も無かったかのように前を向いた。

ふと、天が視線を真横に移せば、天の隣の席の男子が、不思議そうに天を見つめている。

天は、五月蠅そうに口をへんの字に曲げた。



「何？」

「あ、いや、なんでもないけど……。」

「じゃあ見ないですよ。鬱陶しい。」

「……ごめん。」

彼女の言葉に怒るわけでもなく。

ただ、逆鱗に触れぬよう天から目を外す。

天は、ふん、と一人鼻を鳴らした。

キーンコーンカーンコーン。

耳に馴染んだ鐘の音。授業の終わりを告げるものだ。

天の態度のお蔭でイライラしていた教師は、安堵の溜め息をほつとつくと、安心しきった表情で生徒に号令をかけさせる。

天は、重い腰を上げるようにゆっくり立ち上がると、号令に合わせて腰を折った。

「ありがとうございました。」

クラスメイト全員が、声を合わせる。

中には、声を出さずに口パクで礼をする生徒もいただろうが、それなりの音量となって教室内に響いた。

天の耳には、それが、酷く耳障りだった。

「次、なんだっけ？」

「体育じゃなかった？」

「うげ、じゃあ、ジャージに着替えるようじゃない？」

「面倒臭えー。」

授業中にあった天の言動すべてが、実は無かったのではないかと思

うほど、

生徒達はざわざわと騒ぎ始める。

天も、無情の表情で鞆からジャージを取り出し、無言で着替え始めた。その時。

「ねえ。天。今日はどうしたんだよ？」

「・・・莉玖。」

後ろに、泣き出しそうな顔をした魅鈴を従え、あやなみりく綾浪莉玖が天にそう言った。

きりりとした吊り気味の瞳が、どこか強気な彼女を更に強気に見せているが、長い黒髪を左右に結わえ、一文字に結ばれた薄めの唇はカサついている。

白い肌は、手入れがしっかり施されているのか、シミ一つ見当たらないのに、何故か唇だけが荒れていた。

細い眉が、きゅつと震える。

莉玖の後ろにいる魅鈴の肩も、ぴくりと震えた。

「魅鈴、天がおかしかったから、聞いただけじゃん。なんであんな態度取ったんだよ。」

「別に。」

「べつにつて、」

なんだよ。そう続けるはずだった莉玖の口は、ぱくぱく音を発する事無くただ動く。

天の瞳は、苛立たしげに2人を睨みつけていた。

「なんでもないから。」

「っ、なんでもないからって、なんだよ！」

何が、なんでもないのか。

莉玖と魅鈴は、其れを求めていた。

でも、それを理解しているのかしていないのか、天は答えを彼女達に伝える事無く制服のボタンを外す。

ばさりと莉玖の顔にそれを投げつければ、莉玖は怒り狂ったように制服を剥ぎ取り、天に殴りかかった。

「莉玖！」

「お前！本当にどうしたんだよ！」

「……。」

殴りかかった莉玖に、咄嗟に魅鈴が声を張り上げる。

元々仲がよかったからか。

莉玖の、握られた拳は、天の頬にめり込む前に止まった。莉玖の顔を、拳を、何も言わずに見つめる天。

莉玖は、ぎりりと歯をかみ締めた。

「くそっ！」

一度、天の下着の襟元を握り締め、グイと持ち上げてから床に叩きつけるように放す。

莉玖の、精一杯の抵抗か。それでも、天は表情を変えなかった。

天は、ジャージに着替える手を止めて、また制服を着なおす。

ジャージのズボンに履き替えてしまった下は、巻き戻すようにスカートをはきなおした。

制服のボタンもすべて閉め終え、首元や裾をくいくいとほんの少し引っ張りながら直す。

漸く普段の彼女の格好 制服だが に戻ると、彼女はキツと莉玖を睨み、無表情のままの天に苛立っていた彼女の後頭部を掴んで自分の机に容赦なくたたきつけた。

「キヤアーーーー！！」

教室のどこかで上がる悲鳴。 悲鳴。

もしかしたら、莉玖の直ぐ傍に立っていた、魅鈴のものかもしれないし、一部始終を見ていた誰かのものかもしれない。

でも、その悲鳴は一人だけのものではなく、複数の女子生徒のものであったので、正解は魅鈴もほかの女子生徒も上げたのかもしれないかった。

複数分の悲鳴が上がったお蔭で、何が起こったのかと駆けつけた教師は二、三人。

教室の戸に手をかけ、焦ったように教室内を見渡し、机の上で顔を抑えて血を流す莉玖と、その隣で駆けつけた教師の顔を見つめる天の姿を目に映したときの教師の表情は、天にはとても滑稽に見えた。

「いやああ！莉玖う！」

泣き喚きながら、だらだらと汚らしく血を流す莉玖に縋り付く魅鈴。天は、それをつまらなそうに眺めていた。すると、普段は温和な彼女が、珍しく天を睨みつけ、耳障りな甲高い、悲鳴のような声で怒鳴る。

「莉玖に、なんてことするの！」

「。。。。」

「血が、ちがいつぱい、こん、ここんなに！あああ！」

無我夢中で、自分のハンカチを莉玖に押し付ける魅鈴。

莉玖は、痛みに顔をゆがめながらも、声を上げずに歯を食いしばっていた。

顔を覆っていた手のひらを、魅鈴が押し付けるように差し出したハンカチに伸ばす。

血にまみれた彼女の顔が、一瞬チラリと覗いたが、その顔は、片目が潰れているようで、とても元の彼女の顔は想像できないものだった。

もつとも、顔一面にべつとりと纏わりつく血液を全て拭い、包帯が何かで潰れた目を隠せば、その面影を思い出せるかもしれない。

天は、いまだぎゃあぎゃあ騒ぐ魅鈴の声を耳に入れる事無くそう考えた。

そのとき。

「芹崎！お前なんてことをした！」

中年太りの男性教師が、慌てた様子でこちらに駆け寄った。

残りの教師は、いまだ入り口付近で呆然としているらしく、彼一人だけが、漸く正気を取り戻したようだった。

正気を取り戻したと言っても、大量の出血を見て興奮しているらしく、息が荒い。

気持ち悪い、と、心の中で呟いた。

「芹崎！なんとか叫びたならどうだ。」

なんとか言えば、それでいいのだろうか？

ばかばかしい教師の言葉に、ふん、と嘲笑めいた笑みを漏らした。

「なんとか。」

「っお前!!」

殴りかかる一歩手前。

教師はそこでぴたりととまる。

殴れば全てが終ってしまふ。その言葉が、彼の脳内にこだましているのが、手に取るように理解できた。

天は、また笑った。

くるり、と、いまだパニック状態の生徒や教師達に背を向ける。

ここにいる必要なんて、もう無くなった。

彼女の背中が、そう物語っていた。

彼女を、とめるものはいなかった。

全員が、言葉をかけることを恐れていた。

“ 自分もあなるのではないか？”

誰もが、莉玖の姿を哀れんだ。

天は、それを予想して、魅鈴と莉玖に、憫笑した。

## 第二話（前書き）

戦闘シーンがちよびっと入ります。

## 第二話

天たちの教室は三階。

三階から降りれば、もう天を刺す視線は止んでいた。

二階から下には、天が、莉玖に怪我を負わせたことは、まだ行き届いていないようだ。

それでも天は、莉玖や魅鈴のために浮かべた憫笑を消す事無く階段を下りていく。

怪我を負わせた犯人のことは伝わってはいなかったが、その事件のことは、一応伝わっているようだ。

こそこそと、みわたす限りの生徒達が、教師達が、蒼白の顔、吃驚の顔で言葉を交わしている。

それすらも、天にはどうでもよかった。

一階の廊下を抜け、下駄箱で自分のシューズを履き替える。

今はもう5時間目。許可を取らずに早退したとしても、そう五月蠅く言われることはないだろう。

もつとも、そちらではなく今日の天の行動については五月蠅くなるだろうが。

でも、それは既に考えることの意味を成さない。

天は、ここ　学校や、天の住む町のこと　に居る事をやめるからだ。

此処をでることを、決めたからだ。

スタスタと、教科書も何も持たずに校庭を横切る。

静まり返った其処は、天の旅立ちを心より歓天喜地しているようにも思えた。

いや、天にはそう感じられた。



天は、そんな校庭の静けさに答えるよう、堂々とした歩みで其処を抜ける。

校門を抜けた後のコンクリートの道路でさえも、車一つ走っておらず、耳が痛いくらいに静まり返っていた。

悠然とした足取りで、自分の家への道を行く天。

時せつ頭上を通り過ぎる小鳥達は、脅えるようにか、天の姿に歓喜するようにか、チュンチュンと可愛らしい囀りを辺りに撒き散らしていた。

自分の家へと帰り、靴を脱がずに自室へと急ぐ。

その間も、天の表情は変わらなかった。

可愛らしさの欠片も無い登山用のリュックサックを引っ張り出し、必要最低限度の生活用品を詰めていく。

毎日欠かさず身に着けていた携帯電話をちらりと見たが、持つていこうとは思わなかった。それ以前に、必要になることはないだろうと、そう思った。

最後に、風で少し乱れた髪を、愛用の櫛で何度か梳く。黒い髪が、蛍光灯の光で白く眩しく光った。

少しだけ、目に痛かった。

ちらりと時計に目をやれば、もう既に4時を回っていた。

そんなに長い時間旅をする準備をしていたのだろうかと思議に思ったが、考えても仕方が無いと、玄関にいつて靴を履いた。

これも愛用の靴。

歩きやすく、走りやすく、足に馴染んだもの。

白地に赤いラインの入った運動靴だった。

手早くそれを足に嵌め、トントンとつま先を床に立ててより固定する。  
がらりと玄関の扉を開ければ、教室にいた頃の空ではなく、雲が一面を覆う、くすんだ空になっていた。

(雨、降るかな。)

降ったらふったでそれでも良いが、今着ている制服が濡れたら替えが無い。

もう一度戻って服をリュックに入れようか迷ったが、かき集めたお金で後で買えばいいかと思いなおし、  
自分の家・・・いや、家だった建物を後にした。

雲の動きは、酷く遅い。

夜になる前に、一雨降るだろう。

天は、ぼんやり心の中で呟いた。

「おい、」

「.....」

駅に足を踏み入れるその時。

背後で、天に声が掛かった。

人氣が少ない。駅の中にも、人はいない。

天は、ふう、と重い溜め息をついて肩越しに背後を見た。

きらざらと、獣のような瞳を持った莉玖と魅鈴。

天の、あの行動のせいか、2人の瞳は、憎しみかなにかに染まって

いるようだった。いや、混乱かもしれない。何故あんなことをしたのか、天に問いているようにも見えた。

天は、一瞬眉を寄せてくるりと振り返る。

殺気とも取れるその空気が、嫌に心地よく感じた。

「どこに行く。」

「知っているから、来たんじゃないの。」

天を探すなら、天の家や、公園や、天の両親のいる所など、沢山あったはずだ。

まさか、誰も駅にいるなんて考えない。それなのに、何故2人は駅に着たのか。天は、其れをたずねた。別に、聞きたいわけではなかったが。

「体が勝手に動いたんだよ。」

「へえ。友情のセンサーかなんかが働いたの？立派なもんだね。」

莉玖と天の会話。魅鈴は、口を挟める事無く其れをただ眺めていた。ふん、と、教室をでるときに浮かべたような、憫笑を天は浮かべる。莉玖は、ひくりと口元を引き攣らせた。

「なんで、あんなことしたんだ。」

そういった莉玖は、目をそっと撫でた。

潰れたように見えた目　右目　は、そう酷い傷でもなかったよ  
うだ。

清潔感のある白。包帯の白。何故か、莉玖に似合っているように見えた。

にやり、と口角を吊り上げる。魅鈴が、恐怖か、それとも怒りかで、

肩をぴくりと震わせた。

それにも、天は笑う。まるで、脅える様を喜ぶかのように。

「五月蠅いからだよ。」

短い答え。天は、少しだけ視線をさげた。

「それだけか？」

「さあね。」

曖昧な言葉。魅鈴は、ぎり、と歯をかみ締めた。そして。

ぱしん、

乾いた音。

天の耳元で弾けた手。

じんじんと、左の頬が痛んだ。

魅鈴は、怒りに任せて天の頬を殴った。

殴られた天は、無情の顔になって正面を向く。痛みなんて、感じていないように。

叩いた魅鈴は、自分は何て事をしてしまったんだとでも言うように、まさに絵に描いたような絶望の表情を浮かべていた。

「終わり？」

ぽつり、と天が呟く。

はっと、正気に戻った魅鈴は、次の瞬間、莉玖の方に吹き飛ばされた。

ぐう、とくぐもった魅鈴の声。勢いよく莉玖にぶつかった魅鈴は、転がったまま動かない。

莉玖は、すぐさま起き上がって魅鈴の顔を覗き込んだ。腹部を、覆うように抱きしめる魅鈴。

弾かれたように天を見れば、天は軽く足を上げていた。どうやら、蹴ったようだ。

「これは、列記とした正当防衛だよ。魅鈴が先に、手を出した。だから、私は悪くない。」

無表情の顔に、憫笑の絵の具を塗りたくる。

天の顔は、背筋が寒くなるほどに恐ろしかった。

悪魔。その言葉が似合っていた。

「私にも、まだ友情と言う感情が残っていたみたい。

魅鈴の手を止めようと思ったのに、そのまま受けちゃった。やっぱり、あんた達は、私にとって特別だったのかもね。」

つらつらと、何でもないことのように述べる天。

莉玖は、脅えた表情で魅鈴を抱きしめ、天の顔を見つめた。口を見つめた。次の言葉を、望んだ。

「私、嫌になったの。」

ぶお、と強い風が、莉玖と魅鈴、そして天の間を吹きぬける。

梳かした天の髪が、風に靡いてまた戻った。

「莉玖も、魅鈴も、私をおいていくんだもの。嫌になったの。

非力だから、何でもできる魅鈴や莉玖が、羨ましくなった。

魅鈴も、莉玖も、私のものだと思ったのに、私が持たないものをも

つから。でも、それだけなら別によかったの。」

ぴくりとも。表情を変えない。

つい、天が恐ろしくなった。

莉玖の胸の奥から、誰かが叫んでいた。警報を鳴らしていた。

逃げろ、と。

「私をおいて、2人だけで。

仲間はずれなんて、よく言ったもんだよね。ホント。」

は、と、表情を変えずに短く笑う。

莉玖は、たまらず声を張り上げた。

「お、俺は！天のこと、仲間はずれになんかしてない！」

「五月蠅いな。」

「っ！」

莉玖の言葉に間をおかず、地を這うような声でそう吐く天。びくり、と、莉玖は肩を震わせた。

漸く痛みが引いてきた魅鈴は、唸りながら身体を起こす。動く、と、まだ痛いようで、顔をしかめていた。

「もう、あんた達の言葉なんかいらないよ。

非力な自分も、もう要らない。

ほしいのは、あんた達や、世界の全部を手に入れられるだけの力。誰も持たない、強い力だけだよ。」

起き上がった魅鈴を一度眺め、今度は2人を見下ろす。声色は変わらない。

地を這うようなものではないが、それが逆に怖かった。

「狂ってる・・・天、あんた狂ってるよ・・・っ」

顔を痛みで歪めた魅鈴が、げほん、と咳き込んだ。

口から吐き出したのは、血と唾液と胃液。

顔色が悪いようだったが、天にはあまり関係は無かった。

「それはどうも。」

「褒めてねえ、から。」

「へえ。」

どうでもいいよ、そんなこと。

髪を掻き上げ、面倒臭そうに溜め息をつく。

一瞬目を閉じた天の表情は、変わらなかった。

そういう天に、魅鈴は言う。

「ねえ、天。天は何がしたいの？」

「・・・何がしたい？」

魅鈴の問いに、漸く表情を変える。

にんまり。まるで三日月のように、口の端を吊り上げた。

「全部を、私のものにしたい。」

「っ、」

人間のもつ独占欲。それに酷く似ていて、似過ぎていて、逆に違うものようだった。

ごくぐり、と、ほぼ同時に唾を飲む莉玖と魅鈴。

今度は、黙っていた莉玖が口を開いた。

「俺達は、あんたを止めるよ。」

くすり、天が、小さな笑みを漏らす。

魅鈴は、莉玖に続けるように言葉を述べた。

「私達も、天に負けないぐらいの、強い力をつけるから。そしたら、絶対天を止めるから。」

まるで、自分に言い聞かせているような、自分への決意のような、誓いのような其れ。

天は、くつくつと笑みを堪えるように少し俯いてから、2人に吐き捨てるように言った。

「できるもんなら、やってみれば？」

その時、見計らったように電車が着く。

まるで、天が其れを呼んだのかと思うほどに。

もう、天には誰も持つことのない力を持っているのかもしれないかった。

ざわざわと、2人の胸の奥が波打った。

「私を止めたいなら、人間を捨てなよ。」

アドバイス。のように、2人にそう投げかける。

何かを決意した2人の表情を背景に、天は電車の内に消えた。



「絶対に、」

「とめてやるから、」

2人の咳きは、天には届いただろうか。

風と、曇った空が、馬鹿にするように、嫌に優雅に其れを眺めていた。

### 第三話

二人　近藤魅鈴と綾浪莉玖　を置いて電車へと移った芹崎天は、座席に深く腰掛けながら、流れるように抜けていく景色を眺めて口元を歪めていた。

理由は分からない。ただ、莉玖と魅鈴のあの決意のこもった表情が、頭の中から消えないのだ。

もう直ぐ自分のものになるのに、無駄な抵抗なんかして、と、くすくすと鈴を転がすような笑みを漏らす。

今の天には、どこか不釣合いなものだったが、客観的に見れば、それは神聖なものにもみえたのではないだろうか。

天の見る景色が、建物から植物だらけになると、ふと、かつかつという耳障りの良い足音が響く。

特に景色以外に興味を持たなかった天だったが、その足音が、明らかに此方に近づいてきていることを察して表情を消した。

車掌のものか・・・、そう思ったが、違うらしい。

足音の方に目をやれば、派手なピンク色の髪がちらりと覗いた。

「やお嬢さん。リュックサックなんて持って、お出掛けかい？」

「.....」

座席の影からひよっこり覗いたのは、男だった。

表情を消しきった才のまま、天はその男性を観察するように眺める。派手な短髪、血色の良い肌。唇はどちらかと言えば厚いほうがいい、形が整っていてバランスが良い。淡いブルー　例えるなら、セルリアンブルーのような　が縁取った丸い眼鏡の奥の瞳は、これまた派手な金色、または山吹色をしていた。

背丈は見た所180前後と高め。太っているわけでもなさそうだが、

やせて見えないのは彼の着るタンクトップから覗く筋肉質な腕のせい  
か。  
これで性格がよければ、彼と同じ年齢くらいの女性にさぞかしモテ  
たことだろう。

天は、上から下までじろりと観察してから、漸く男の顔を見つめた。

「隣、か、向かいの席。座っても良い？」

「向かいの席、どうぞ。」

「ありがとうございます！」

へらり、とした笑みが、天に向けられる。

天は、面倒そうに眉を寄せてから、いやいや自分とは対角線の位置  
にある場所を指した。

大きな身体を嬉しそうに揺らし、彼は嬉々として其処に腰を下ろす。  
天の、無意識に出た溜め息には、気がつかなかったようだった。

どさ、と重量の分かる音を立てて、彼は持っていたものを降ろす。  
どうやら肩にかけていたようで、それには丁度良い長さの紐は  
つきりいつてしまえば縄があつたが、天はその縄ではなく、背  
負っていたものに目を見開いた。

大刀。いや、大剣だろうか。

銃刀法違反という法律がある日本に、何故こんなものを持ち歩いて  
いるのだろうかと思議になるが、その大剣は、柄等に収まる事無  
く白銀の刃を晒したままその場に置かれている。

電車の床に置くのは、刃に傷をつけないのだろうかとぼんやり思い  
ながらも、天は大剣を凝視した。

「あ、これ、やっぱり見えるんだ。」

「……………」

突然、男の楽しそうな声。

天は、首をかしげた。

“見える”とはなんだろうか。何故、そんなに嬉しそうなのだろうか。どこか不快感を覚える彼の言葉に、天は眉を顰めた。

「いやあ、よかったよかった。探してたんだよね、うん。」

乾いた笑みを浮かべながら、心底嬉しそうに、楽しそうに床に置いた大剣を持ち上げる。

重そうな音を立てて置いたわりには、軽々と其れを持ち上げている男。

天は、怪訝な表情でそれを見た。

「まあとりあえず、僕の名前は影丸。よろしくね。…えーっと…

」

「……芹崎 天。」

「天ちゃん！変わった名前だねえ。漢字なんて書くの？」

「……………」

行き成り呼び捨てか。

顔を顰める天に対して、男 影丸 は実におちゃらけた様子で

天にそう尋ねる。

天は、溜め息をつきながら窓の外の景色を見た。

いつの間にか、本当に深い森の中を走っていたらしい。

木々の間には、少しの光しか覗かなかった。

「テン。空ってという意味の、テン。天国のテンとかいて、あまと読みます。」

「へえ、良い名前だ。綺麗だね！天ちゃんにぴったり。」  
「そりやどうも。影丸さんも、ぴったりだと思いますよ。」

変な人だし、変な名前だし。

と、嫌味たっぷりに呟いて見せれば、影丸はあっはっは、と大袈裟に笑った。

少しも傷ついた様子の無い影丸に、天は少しだけ面白くなかったが、ちらりと影丸を見ただけで直ぐに窓の外に視線を戻した。

「それで。“見える”ってどういう意味ですか。」

吐き捨てるように天が言えば、影丸は、思い出したように大剣を手取る。

慌てたように大剣を彼女の前にずいと突き出した影丸は、天の不審な目に戸惑う事無く話しだした。

「この剣はね、僕の力の結晶だよ。」

「……………」

実に、信じ難い言葉だった。

天は、咄嗟にあたりを見回す。

時間は帰宅のラッシュがあっても良い頃なのに、天と影丸が乗った車両には、誰一人として人間の姿は無かった。

「君、誰も持たない、強い力がほしいんだろう？」

「……………なんで、其れを知っているの？」

影丸のその言葉を聞き、スッと目を細める天。

天が電車に乗るとき、他に人はいなかった。

乗ったときも、人が少なく、会話を聞き取れるものはいなかった。ただ。

その話をしていたのは、電車が来る前なのだから。何故わかったのか、何故其れを知っているのか。

天は、細めたダブルブラウンの瞳で、じっと影丸を見つめた。

「うん。別に僕は天ちゃんに危害を加えるために此処に来たわけじゃないよ？」

僕はね、ちよつくら、世界中を旅しているだけなのさ。」

不審極まりない影丸の言葉。

それだけで、天が信用するはず無かった。

逆に強まる警戒に、だんだん焦ってきたのか、影丸は冷や汗を、額から頬へと落とした。

「ううん、えーっと、はつきり言っちゃえば、僕には君の求める強い力がある。

僕は、そのー……まあ天ちゃんの“力を求める感情”につられて此処まで来たわけなんだけどー……。」

ちらちらと、確認するように天をみる影丸。

天は、目を外す事無くただひたすら影丸を見つめていた。

だが、いつまでたっても焦ったままの影丸を見て、こいつを疑っても仕方が無い、と思ったのか、

天は重い溜め息について視線をそらした。

「それで、私の感情につられてきて、それでそうするんですか？」

「……信じてくれるの?!」

「ウソなんですか？」

「いやいや、本当だとも!!」

嬉しそうに、レンズの奥の目を見開いて、影丸は勢いよく立ち上が

った。

影丸の言葉に、からかうつもりで言った天は、本当に嬉しそうな様子の子の影丸に手を握られて激しく上下される。ぶんぶんと、何度か腕が千切れるのではないかと錯覚した。

壮絶な握手から解放された天は、ぐったりとつかれきった様子で座席に背を預ける。

いやー、ごめんごめん、なんて、困ったように笑いながらそういう影丸に、天は不機嫌そうに視線を移した。

「で？」

「……うん。できれば、君のお手伝いがしたいなーって……。」

「……お手伝い？」

「……うん。」

天の、怒りの混じった声色で尋ねられ、大の大人が情けないくらいに方を奮わせる。

聞き返す天の言葉に、少しだけ安堵した様子で、影丸は顔を上げた。

「さつき、僕は強い力を持っているって言ったでしょ？」

あれは、僕たちの中で『オガーデリック』と呼ばれていて、君達の言葉で言えば、魔法とか超能力みたいなもので、オガーデリック使いでないと見えないものなんだよ。」

「……へえ。」

実際、半信半疑だった。

影丸が持っていた大剣がオガーデリックというものでできているのなら、他の人間が見えないのは分かる。

でも、この世の中でそんなものが存在しているだなんて、とてもじゃないが信じられなかった。

「じゃあ、なんで私には見えたんですか？」

オガーデリック使いしか分からない。

それなら何故自分は見えたのか。

天は、そう尋ねるように言葉を投げる。

にっこりと、優しいな笑みを浮かべる影丸は、うん、と一度頷くと、また口を開いた。

「時々いるんだ。力を求める故に、こうした僕達のオガーデリックを見極める人って。

僕達は、オガーデリックを強めると同時に、そうした人たちにも、

オガーデリックを伝えている。」

「なんで、強くする必要があるんですか。」

「オガーデリックを伝えるとき、強くしていた方が何かと便利だからだよ。オガーデリック使いは、世界でも減少し始めている。元々少ない人数だったから、こうしたことは結構前から予測されていたんだけど、君みたいなオガーデリックが見える人って、少ないんだよね。」

ふう、と飽きた様に溜め息をつく影丸。

天は、それに一瞬眉を顰めたが、直ぐに皺を無くした。

「ばりばりと豪快に頭を掻き、猫背だった背中をぐぐつと伸ばす。うーんという唸り声を聞いていると、今の今まで眠っていたようにも思えた。」

「はあ、と満足気な溜め息をつく影丸。」

天は、見計らって言葉を続けた。

「オガーデリックが見える人しか、其れを伝えられないんですか。」

「うん。見えない人だと、オガーデリックが使えない言う意味だけ」



ら。まあ最初から見えるわけじゃないし、後々になって見える人も  
いるんだけど。」

「・・・なんか曖昧ですね。それ。」

「でしょー?」

はは、と苦笑する影丸。

天は、真っ直ぐに影丸の瞳を見た。

丁度、森を抜けるのか、木々の隙間から光が漏れ、影丸の瞳がキラ  
キラ光って見えた。

「私に、協力すると言っていましたね。」

「うん。お手伝い、だけど。」

「貴方は、私は何の目的のために力を求めているか、知っていてそ  
れを言っただんですか?」

「うん。」

こくり、と深く頷く。

天は、数秒間の間それをじっと見つめたが、すぐに溜め息をついた。  
本日何度目の溜め息だろうか、天は、こいつに手伝いを頼んでも良  
いのだろうかと思がした。

「僕に頼むしか、ないでしょう?」

「・・・。」

心を読んだように、その言葉を告げる影丸。

天は、一瞬殺気を含んだ眼差しで影丸をみたが、直ぐにそれを無く  
した。

影丸も、同じように殺気を含ませていたからだ。

ざわり、と背中を鼠の大群が走り去るような、そんな気色の悪い殺  
気。

それでいて、肌を刺すような心地良い空気。

こいつと闘れば、死ぬのは自分だと、反射的にそう察した。

「僕以外のオガードリック使いは、今外国の方にとんでいる。そいつらに頼むことはできるだろうけど、難しいんじゃないかな？何年かかるか分からないし。」

「どうでしょうか。貴方のように、私の“力を求める感情”を察知して、私の元まで来るかもしれませんし。」

「その“察知する力”も、ある一定の距離にいるとわからなくなっちゃうんだよね。」

また、楽しそうな声色。

きらきら輝く金の瞳が、ゆったりと細くなった。

諦めたような溜め息。天は、観念した様子で頷いた。

「貴方に頼むしかないんですね。」

「そういうこと。よろしくね天ちゃん。」

「・・・せめて、天にして下さい。」

もう、呼び捨てを直す気力さえ無かった。

## 第四話

がたたん、がたたん。

心地の良い揺れが眠気を誘う。疲れていたのかは知らないが、天の  
瞼はだんだんと重くなっていた。

(寝ようか……)

考え込むように少し俯く。その間も、瞼は下がり、莉玖や魅鈴を睨  
みつけていた鋭い目付きは、もうその面影すら見当たらない。なん  
とも間抜けな表情をしていた。

「眠いのー？天。」

「……ね、むくは無いと思います。」

「曖昧だねえ。寝ても良いよ？別に次の駅で降りるわけじゃないし。  
降りるときも、ちゃんと声かけてあげるよ？」

天を気遣うように顔を覗き込み、目を細めて心配そうな表情をする  
影丸。山吹色の瞳が、また太陽光に反射してまぶしかった。

天は、その眩しさにますます目を伏せる。だが、天はふんと鼻を抜  
けるような笑みを漏らすと、至極冷え切った声色で吐き捨てた。

「結構です。貴方に、寝顔なんて警戒心の欠片も無いもの見せるの  
なら、死んだ方がマシです。」

氷のような、冷たい声色。はは、と苦笑した影丸は、うんと一度頷  
くと、納得したように、安心したように呟く。

「そこで、警戒心とかれて寝ちゃったら、僕が天を殺してたしね。」  
「……。」

ただ、へらへらしている男でもないようだ。ちゃんと、オガーデリックの後継者に相応しい人間を選んでいるようだ。そして、そのオガーデリックを受け継ぐものとして、自分が選ばれた。力が手に入るのは嬉しかったが、そんな風には選ばれるのは良い気持ちがない。天は、強くなって、こいつを利用できるだけ利用してから殺せば良いか、と自己完結させた。眠気覚ましに、ふと窓の外の景色を見れば、いつの間にかまた森に入ったらしい。

あの生ぬるい町から遠ざかることができるのは嬉しかったが、いい加減に飽きる。

はあ、と、溜め息をついた。

がたたん、がたたん。

「……本当に眠くないの？」

「……答えなきゃ駄目ですか？」

「うん……。じゃあ、答えなかったらオガーデリックを教えてくださいないって言ったらどうする？」

「……、眠いです。」

「そっか！」

意味もない問いかけ。何がそんなに楽しいのか、天のその言葉を聞いて、にっこりと花が咲くような笑みを浮かべた。

呆れた表情で影丸を見る天。影丸は、天の感情に答えるように口を開いた。

「やっぱり、師と弟子なんだから、二人の感情は通じ合っていないと駄目だよね！！」

前言撤回。やっぱりこいつはただのへらへらした男だ。

天は、またしても大きな溜め息をついた。

ねえ！何で溜め息つくのさ！なんて、ブーブーと文句をつく影丸を目の端に、天はじつと景色を見る。深緑だけのその絵画のような光景は、逆に眠気を誘ったので、一つ欠伸を零して、影丸のほうに視線を戻す。

影丸は、不思議そうに首をかしげた。

・・・全くもって、文句を言ったり呆けたりと忙しい男だ。

「眠いですね。本当に。何が眠気覚ましになることはないですか？」

「え、それを僕に求めるの？」

「当たり前です。私の前に貴方以外の誰がいますか。それに、先程“師と弟子が”どーたらこーたらって言っていたじゃないですか。」

ふん、と嘲笑を浮かべる天。

困ったように、影丸は笑った。

「あはは。そうだよな。うーん。そうだなあ。」

細い眉の端を下げ、ハの字にして笑う。顎に手を当てた。どこその名探偵のようだ。

うーんと唸って話題を探しているのか、形の良い薄い色の唇も歪む。天は、その様子をじつと睨みつけるように見つめた。

「じゃあさ、僕が天に、質問しても良い？」

「・・・質問、ですか。」

影丸の言葉に、あからさまに顔を歪める。

面倒なことは避けたい、と、表情が物語っていた。

そんな天の表情を理解していても、影丸はにこにここと爽やかスマイ

ルを浮かべたまま。また、オガーデリックのことを盾にされては堪らんと、天は不機嫌そうに頷いた。

「ただし、言いたくないことは言いませんから。」

「うん！じゃあさ、天の元友人さんの名前、とか！」

「・・・名前、貴方、名前がすきなんですか。」

自分のときもそうだったが、わざわざ名前の漢字まで聞いてきていた影丸。

影丸自身の名前もなかなか個性的なものだったが、彼は名前に関心を持っていろいろだろうか？

天が、眉に皺を寄せたまま尋ねた。

「あー、うんまあね。後で分かると思うけど、オガーデリックでは自分の名前を使うんだよ。」

ばりばりと、豪快に頭皮に爪を立てて搔く。彼の癖なのだろうか。髪が派手な色をしている理由も、無意味に少しだけ気になった。

「僕達は、名前にはそれぞれ神聖な力が宿っていると考え。だつて、数え切れない名前の中からたった一つが自分のものになるんだよ？」

真っ直ぐに、天の瞳をじっと見つめて話す影丸に、天も一瞬その通りなのではないかと思ってしまったが、慌てて視線をそらした。影丸の瞳には何か仕掛けがしてあるのだろうか。オガーデリックの応用なのかは知らなかったが、その力は結構ためになると思い、後で是非とも聞き出そうと心に決めた。

「どうでしょうか。私は、あまり素晴らしいとは思いません。別に

自分の名前が嫌いなわけではありませんが、名前なんて、ただの間という器の名前じゃないですか。精神の名前ではないと思います。

「……精神の名前、ねえ。」

「自分の名前は自分で決める。他人に決められることが、私は一番嫌いです。」

少しだけ、目を細めてそうきっぱりと言い捨てる。影丸は、少しだけ黙り込み、また楽しそうに口を開いた。

「じゃあ、天は、天ではない違う名前に変えたいの？」

「……いえ、これはこれで気に入っているので、変えません。」  
「変なの。これじゃあ矛盾しているよ。」

「いいえ、これは私の決断ですから、矛盾などしていませんよ。」  
「そうかなあ、変なの。」

あっはっはっは、と豪快に笑ってそう言う影丸。もう一々反応するのも面倒になったのか、天は軽く目を瞑ってそっぽを向いた。

「それじゃあ話に戻ろうか。ね、教えてよ、元友達の名前っ」

影丸の言葉の発音がおかしいのか、天の耳がおかしいのか、“元”友達、というのが何故か強調されて聞こえた。

ふと、影丸の目に視線をやれば、にんまりと悪戯っぽく微笑む。どうやら、影丸の発音のせいらしい。

「一人は近藤 魅鈴、もう一人は綾浪 莉玖です。」

「みずず、にりく、ね。漢字は？」

「魅惑の魅、鈴は楽器の鈴です。綾浪 莉玖のほうは、茉莉花の莉に黒色の珠、という意味で玖だそうです。」

「天の元友達には、変わった名前の人が多いんだねえ。」

「貴方に言われる筋合いなんてないと思うのですが。」

「なに？元なのに、友達悪く言われて悔しいの？」

にんまり、意地の悪い笑みを浮かべて、天を挑発するようにみる影丸。

だが、天はふんと一度鼻を鳴らしただけで、特に感情を露わにすることは無かった。

「友達、ですって？まさか。あの人たちは、私のものになる。だからこそ、見苦しい言葉を見逃せないだけです。」

「私のもの、か。じゃあ僕は？僕も、天のものとなるの？その素質はある？」

「はつきり言えば、皆無ですね。」

「……まだなっていないとはいえ、師に対して随分きついねえ、天。」

「勿論。師には包み隠さず感情をお教えしたほうが良いでしょう？」

ちら、と横目で影丸を見やり、憫笑にもにた笑みを浮かべる。

はあ、と溜め息をついた影丸は、同じように微笑んだ。

「それにしても、全然感情を露わにしてくれないけど？」

「……。お黙りなさい。」

否定も肯定もせず、天は溜め息をついた。



## 第五話

極普通に生きている人間が、しかも、まだまだ人生これからである  
中学三年生が、力を求めるだなんて、そんな非現実的なこと考えた  
事があるだろうか？

科学的な進歩が今も続いているこの現代社会で、魔法なんてものを  
信じられるだろうか？

ぼんやりと淡いブラウンの 色褪せているともいえる 座席の  
シートを眺め、私、芹崎天は一定のリズムで呼吸を繰り返す。

もし、この呼吸を止めたら、私の心臓や脳に酸素がいかなくなつて、  
私は死んでしまうのだろうか。一度、ふうと大きく息をついた。

ああ、そういえばこの大きな呼吸は溜め息というのだった。

溜め息、というものは良い。

息を吸い、一度溜めて吐き出すから“溜め息”というのか、名前の  
由来は定かではないが、いい。

感情を落ち着かせることができるし、なにより昔、負のオーラを取  
り除くことができるとか言う迷信を聞いたことがあるからだ。

別に、負のオーラとか言うものを取り除きたいわけではない。ただ、  
あると、私自身が他人に劣っているという気分になる。

要らないと思つたものは排除するのみ。それが一番手っ取り早く、  
一番簡単で、分かりやすい。

ああ、迷信で思い出したが、確か、溜め息をつくると天使が一人死ぬ  
らしい。

それも、気分が良い。天地を支配する神とか言う有りもしない存在  
の使いだ。胸糞悪いそんな奴等は、全部消えて頂きたい。

ふと、目の前で寝扱ける男、影丸に目をやる。私に、警戒心を消し  
て眠りに着いたら自分が殺していた、なんていう脅しをかけておい

て、自分はこのうとうと寝やがる。

いら、と一瞬殺意が湧いたが、今こいつを殺してしまつては私は力を得ることができない。いや、難しくなる。

仕方なく、ぐりりと己の手のひらに爪を食い込ませるようにして手を握り締めた。

ぎちぎちと、肌が擦れ合う。と、ぷちりという何か切れる音。不思議に思つて掌を開けば、そこにはいくつかの爪あと、綺麗に皮膚が裂け、赤い肉が覗いていた。

爪を見れば、所々に赤い液体がこびり付いている。長くは無いはずの爪。思わず、にやりと口角を吊り上げた。

確か、この表情は“笑み”とか言つたか。

一つ一つの感情を、言葉として覚えておくのは実に面倒臭い。

その場その場で表情を変えるのも、面倒臭い。人間というものは、何故こつちも名を付けたがるのか。ほとほと呆れ、溜め息が止まらなかつた。

さらに。

影丸の、濃い桃色の髪が揺れた。色はあまり好かないが、なかなか綺麗な髪をしていると、思う。指を通せば、心地よさそうだ。つい、手を伸ばしたくなる。

この男の存在は、力を得た後は必要ないだろうが、髪だけは残してやっても良い。ああ、あと目も。

宝石のようにきらきら光る眸。太陽が、そのまま小さくなってしまったみたいなの、強い金。または、くすんだ山吹。どちらにせよ、珍しい色なので、綺麗だ。

ぼんやりと、眺める。

時せつ、んが、と寝言のようなものを吐く影丸。

何とも間抜けな姿だ。このまま殺してしまえるのではないかと錯覚

さえ覚えるくらいに。でも、此処で私が手を出せば終る。人生も、力を得るといふ手段さえも。

外見的にはへらへらとした奴にしか見えないが、面白いくらいに中身を隠す。苦手なタイプ、ではないかもしれない。

ああ。面倒臭い。

「なかなか良い性格しているねえ、天。」

「・・・起きていたんですか。」

くつくつと、人を馬鹿にしているような嫌な笑みを浮かべながら、影丸はうつすら目を開ける。黄金の眸が、私を写した。ほしい。

私が、影丸に敬語を叩いているのは、こいつとの距離を保つためである。本来ならば　簡単に言えば、莉玖や魅鈴に対してなら素の口調で話してやっても良いが、こいつはまだ信用しても良いとは言いいれない。

全く、私も、吹っ切れてから警戒するようになった。良い進歩だが。

「二度か三度、僕に殺気を向けたでしょう？」

「気付いていたんですね。でも、動きませんでした。」

寝ていたはずなのに、なんて、ありきたりな疑問は浮かばない。こいつが私より強いから。私がこいつより弱いから。それが勘付かれただけだ。何も尋ねる意味はない。

「うん。試そうと思って。」

「まだ、疑ってらっしゃるんですね。それとも、判定ですか？私がオギーデリックの後継者であることが相応しいかどうかの。」

「あっはっは、後者が正解かな？」

隠す事無くそう言う影丸。隠す意味もない。隠して、どうなるという所だ。

私は、まだ判定は続いていたのかと溜め息をついた。迷信が当たっているのなら、今天使が一人死んだだろう。ついでに、もう一度吐いてやるうか？心の中で、ほくそえんだ。

「で？判定は？」

「勿論。OKだったよ？天は素晴らしいね。」

「光荣です。」

感情が、少しもこもらない返しの言葉。

影丸は、少し苦笑したようだった。

「天は、本当に感情を表に出さないんだね。」

「出す必要がありません。隠していて損はありませんし。」

何年か前に読んだライトノベルの主人公も、言っていた気がする。

『感情が表に出していれば、それは敵に次の攻撃手段を教えていることに繋がる』と。別にそのために感情をあまり露わにしないわけではないが、それは意外と共感できた。

「さて、もう少しで着くよ。」

「.....」

彼の言葉によると、もう少しで到着らしい。

全く。長すぎる電車の旅だった。座りすぎて、足腰がびりびりと麻痺している。私は、それを解す様に軽く揉むと、簡単に荷物の整理をした。

《まもなく、 駅、 駅に到着いたします。 お忘れ物の無い様、  
ご注意ください。》

お馴染みのアナウンスが車両内に響き渡る。

そういえば、此処には一度も車掌のものが来なかった。

なんとなく影丸を盗み見れば、影丸は其れを予測していたのだろうか、こちらを見ながら微笑んでいた。・・・食べない男だ。

「さーて、降りようか。」

来たときのように、重そうな大剣を肩に担ぐ。それでも、まるで発泡スチロールでも持っているのかと思うほどに軽々と縄をかける影丸。どんな仕組みで、そんな風に軽くなっているのが気になった。それでも、焦ってはいけない。ゆっくり。じっくり、時間をかけて、完璧にしなければならぬ。

力が得られると思うと、口元が歪むのを押さえられなかった。

「天、置いていくよ。」

人気も多いわけではないのに、からかっているのか少し先でこちらを振り返る。

リュックサックを背負いなおして、私は彼を師として呼んだ。

「師匠。」

「あ、それいいねえ。じっくりくる。」

気に入ったのかは知らないが、影丸は馴れ馴れしくも、私の頭に手を置いた。

骨ばった、大きな手。すぐに、払いのけた。

「セクシャルハラスメントで訴えます。 師匠。」

「え、それって本気？」

「次やったら。」

「そりゃないよ！」

これは褒めてるんだよ天！

慌てたようにそう叫ぶ師匠に、人目というものを気にしていただき  
たかった。

## 第五話（後書き）

天の性格が変わった気がしますが、  
ノータッチで。

## 第六話

ざわざわと、耳元で風が踊った。

髪が、風と共に揺れ動き、首元や耳を撫る。魅鈴と莉玖は、二人しつかと手を繋ぎ合い、一心不乱に獣道を進んでいた。

二人の頭上に聳えるのは樹齢約百年の木、木、木。

深い深い森には死人も出なくはないという噂があったようだったが、それでも二人は立ち止まらなかった。

二人がただただ目指すのは、天を取り戻すこと。

独占という欲に溺れ、塗れ、前を見る眸すらも失ってしまった天の手を、二人で光に導くため。

高過ぎるとも低過ぎるとも取れない、二人の目的を達成するためだ。

何故二人がそんな奇妙な森に入っているのかといえば、それはその森に伝わる噂を頼りにして、という理由だ。

その森は、「悪魔の住処」を通称とする。

なんでも、その森の近くに住む老夫婦によれば、数十年前から女が住み着き、それからというもの森の奥で青白い光が每晚空に向かつて放たれているという。

なんとも信じ難い昔話のような話だったが、今力を求めている二人にはそんな頼りない噂も信じるしかなかったのだ。

「っわ、いた、…っ」

「おい、気を付けるよ、後もう少しだ…多分。」

突然、がくんと体勢を崩した魅鈴が、捻った左足に手を添えて座り込む。

驚いた莉玖が、せいぜいと息を切らしながら振り返り、立ち止まった魅鈴のほうへと足を運ぶ。



魅鈴は、痛みに顔をゆがめながらぎりぎり歯を食いしばった。

「い、つつう、ごめん。莉玖。」

「・・・大丈夫だよ。少し、休むか？」

「ううん。行こう。」

「でも、」

その足では、と続けようとして、やめる。

二人には、時間が無いのだ。

天は、今にも力を手に入れ、自分達の手の届かない所まで達しているかもしれない。そうすれば、自分達では天を光に導くことはできない。

二人の背後では、そんな悲しい危機感が、今も二人を急かしているのだ。

立ち止まっている、時間は無い。

悔しそうに唇を噛む莉玖。魅鈴は、そんな莉玖を見上げて、つられる様に眉を顰めた。

だが、その時。

「あーらあらあら？お客様？めーずらしいわね？」

「っ！」

「だ、誰?!」

今の今まで気配の無かった前方に、突然現れた人間。

慌てて顔を上げ、息を呑めば、其処にはその場に似つかわしいとは言い難い格好の女性がいた。

栗色の長い髪は腰まで揺らめく様にウェーブし、眉で切りそろえら

れた前髪の下には藤色のきらきら輝く瞳が有る。

色の白い、肌理細やかな頬は、一部分、ほんのり桃色に染まっていた。

すらりと高めの背丈は、方から膝までの大きめのワンピースに包み込み、引き締った細い足は編み上げのサンダルで覆っていた。

感じる違和感天と似たものなのに、女性からは戦意も殺意も何も伺えない。

きよとん、と呆ける二人。魅鈴は、足が痛むのも忘れてしまったのではないかと思うほどだ。

「どうしたの？そんなに固まって。」

自分を見て、石のようにかちりと固まる二人を見て、くすくすと笑いながら二人に歩み寄る。

たん、たんときいステップを踏みながら近寄る様は、相当その森に通っているようにも見えた。

「あら、怪我しーてるじゃない。」

手を添えている魅鈴の足を見つけた女性が、驚いたように声を上げる。

そして漸く正気を取り戻した莉玖が、はっとして女性をにらみつけた。

「あなた、誰だ。」

「・・・あーらあ？」

がつり、と、後ろから首を鷲掴み、脅すように掴む力を強める。

緊張感の欠片も見当たらない間の抜けた声をもらして、女性は動き

を止めた。

ふと、莉玖が魅鈴の足を見れば、魅鈴の足には女性の手が伸びている。

ち、と舌打ちをした。

「なにを、しようとしたんだ？」

「……何って、治療ですけど？」

莉玖の刺々しい問いに、ふん、と拗ねた様に唇を尖らせる女性。

つんと前に突き出た鼻の頭が可愛らしかったが、莉玖はそんな不真面目である考えに叱咤をした。

「お前は、この森に住む悪魔か？」

「……失礼しーちゃうわねえ。私は悪魔なんかじゃなく、デュー・ストーム使いよお。」

「で、るーすとーむ……？」

喫驚にて、痛みを忘れていたであろう魅鈴が、また痛み顔に顔をゆがめる。聞きなれない言葉を耳にし、不意に口にすれば、女性はごくんと頷いた。

「貴女達、もしかして、デュー・ストームを手に入れに来たわけえ？」

「そうだ。」

短い莉玖の返答に、ますます唇を尖らせる。目も、少し細めたようだった。

ざわりと一度、風がざわめく。それに伴い、足元の雑草や、頭上の木の葉が揺らめいた。

彼女の長い髪も、一緒に揺れる。

色は違えど、川のようにも見えるそれに、莉玖は、ほうと心の中だ

けで溜め息を吐いた。

「人に物を頼むとき、そんな態度でいいわけえ？」

「。。。。。」

じとり、と背後にいる莉玖を睨みつける。藤色の眸が、莉玖を写した。

彼女の眸は、幾千もの光が集まってできたのではないか。そんな錯覚すら起きる美しい眸。莉玖は、ふらりと目眩がした。

何も言わない莉玖を見て、女性は不機嫌そうな顔をまたゆがめる。もう、女性としてどうなのかと問いたくなる表情だ。

はあ、と長く大きな溜め息を吐き出せば、彼女は莉玖の手を振り払って立ち上がった。

「出直したら？」

「っ、は？」

「私は、貴女達みたいいな失礼な人のお願いは聞いてあげないわあ。」

「

「そんな！」

あんまりだ、とでも言うように、魅鈴が悲痛な声を上げる。だが、女性はそれを咎める様にぎろりと魅鈴をにらみつけた。

「怪我は治してあげるけど、失礼な人のお願いを聞いてあげるほど、私は心は広くないのよお。」

踵を返してさっさと二人から遠ざかる女性。

二人は、一瞬気まずそうに顔を見合わせてから、仕方ないか、と溜め息を吐いた。

魅鈴は、足に違和感を感じ、添えていた手をどかす。  
するといつの間にか、そこには腫れはなく、普段どおりの足があっ  
た。

「……璃玖、」

「ん？」

「これ、」

呆然としながら莉玖を呼び、自分の足を指差す。莉玖も、息を呑ん  
でそれをにらみつけた。

「……辿り、着いたのかな？」

「……まずは、もう一度出直したほうがよさそうだけだな。」

莉玖の言葉に、足に痛みが無いかどうかを確かめ、すくつと立ち上  
がる魅鈴。

莉玖は、来たときと同じように魅鈴と手を繋ぎ指を絡め、もと来た  
道に戻って行ったのだった。

## 第七話

影丸の後ろをついて駅を出た、天の目の前に広がった光景は酷く寂れた町並みだった。

もとは発達した所だったのだろうか。

それとも建設途中で終わってしまったのだろうか。

どちらにせよ、灰色のコンクリートジャングルが空を覆い隠すようにそびえ、所々崩れる壁からは、家を失ったホームレスの子供達や大人達がごろごろと毛布もかけずに寝転んでいた。

もしかしたら、死んでいるのかもしれない。

そんな考えも浮かんだけれど、哀情の欠片も確かめられなかった。

死ぬ方が悪い。生きなければ生きれば良い。

天は、ふんと小さく鼻を鳴らした。

「ここから、少し歩くからねえ。」

間延びした影丸の言葉。肩越しに振り返り、金色の瞳を細めながらそう言う。

声には出さず、こくと頷くことで了解を伝えた天は、辺りを観察するのも面倒だとばかりに俯く。

影丸は、くつくつと楽しそうな笑みを浮かべた。

そのとき。

「お姉ちゃん。」

「っ、」

くい、と軽く引かれる制服の裾。

一瞬感じ取ることのできなかつた気配に息を呑んだ天は、悔しそう

に眉を寄せたが、すぐに振り返った。

「なに？」

「ご飯、頂戴。」

振り返った其処に居たのは、虚ろな目をした一人の子供。

よく見ると、子供の後ろには、物陰に隠れているのかいないのか、頭や体の一部を覗かせてこちらの様子を伺っている他の子供もいた。ずい、と力なく差し出された手。

肉が削げ落ちたように細い指に、天は目を細めた。

ところどころ泥で汚れている。

此処では満足に身体も洗えないだろう。そして、食料も同じく。

天は、背負っていたリュックから保存食用のビスケットを数枚取り出して子供の手の上に置いた。

「食べて良いよ。」

「ありがとう。」

柔らかく、酷く繊細な笑みを浮かべた子供。

天も、無意識に優しいげな微笑を浮かべていた。

その様子を見ていた影丸は、驚いたように目を見開く。そして、軽く口笛を吹いた。

「天。そろそろ行くよ。」

「はい。」

影丸に返ってきたのは、感情のこもらない無機質な声。

目的地に着くまで、影丸はぶつぶつと文句を吐いていたが、天は一つも声をかける事無くただ後ろについていた。

ぎいいいい。

もう何年も油が差されていないであろう重い扉を、ただ片手で押し上げるように開く影丸。

天は、手伝った方が良いのかと一瞬迷ったが、直ぐに面倒臭くなつてその場で影丸が歩き出すのを待っていた。

扉が開き、広がった景色は旧いバー。

カウンター以外のテーブルには、何が書かれていたのか確認できないほどに汚れたラベルが張つてある瓶がごろごろと転がっている。

いつ飲まれたのだろうか。天の足元の透明の瓶の中には、虫が巣を作っていた。

「いらつしゃい。」

しゃがれた声が、影丸と天の耳に届く。

影丸が、特に表情を変えず笑顔のまま声の方向を向けば、そこにはその辺で拾つたような木の棒を杖代わりにした、老人がいた。

腰に手を当て、やつれた表情でこちらを見ている。

老人が、また口を開いた。

「なんにしましょうか？」

「部屋を借りたいんだけど。」

能天気な影丸の声。天は、影丸をみる事無くただ老人を睨むように見つめていた。

ぼさぼさに乱れた黒髪に、所どころ一掴み程度に白髪が覗いている。黒だったのか茶色だったのか判断できないほどに色褪せた眺めのエプロンは、ずるりとだらしなく垂れ下がり、老人の薄汚い服を覆い隠していた。



天の、不審な瞳には、訳が合った。

気配を感じ取るのは、常人よりは優れている天。

それなのに、この店とはいえない店の扉を開けるまで、老人がいるかどうかすら分からなかった。

先程もそうだ。天の年齢の半分を行っているかいないかの子供の気配を感じ取れなかった。

どうみても、普通の人間にしか見えない此処の住人が、何故こんなにも気配を絶つのが上手いのか。

天は、自然と顔を顰めた。

「承知しました。5号室が開いております。・・・二部屋にしまし  
ようか？」

影丸の言葉に、老人がちらりと天を見て確認する。影丸も一緒に天に目をやったが、

天は、「ベッドが二つあれば一部屋でも良い」と答え、口を閉じてしまった。

影丸は、老人に目配せし、「お願いします」と伝えると、深く頷いて背中を向ける老人の後を追うように足を進める。

勿論、天もその後についていった。

「いやー、意外だなあ！天にもあんなに可愛いトコがあったんだねえ！」

少し埃臭いベットに腰掛けながら、影丸がそう漏らす。

あの馬鹿でかい大剣は、ベットの端の壁に立てかけてあった。

影丸の手に届く位置。間の抜けた奴だが、その辺はやはり考えてい

るらしい。

「何がですか。」

櫛で軽く髪を梳かし、整える天。

ちらりと横目で影丸を見れば、丸いレンズの奥では茶化すような瞳がこちらを見ていた。

イラ、と苛立ちが一瞬燃える。だが、頭を振ってそれを散らせた。

「子供に、あんなに可愛い笑顔を向けるなんてねえ。」

「・・・ああ、あのことですか。」

「僕は天の師匠なのに！まだあんな笑顔見たことないよ！」

「知りませんよ。」

見せて、というように声を上げる影丸に、天はそっぽを向いたままそう答える。

それを聞いて、つまらなそうな声を上げたのは勿論影丸。

ぶーぶーと子供のように唇を尖らせ、鬱陶しく文句を言った。

「それはそうと。」

「ぶ？」

天の言葉に、ブーブー言うのをやめ、影丸は首を傾げる。

天は、こんな奴に頼んで大丈夫なのだろうかと心配になったが、溜め息をついてからまた口を開いた。

「なんなんですか、此処の住人は。」

「ああ、気配のこと？」

「その通りです。」

尖らせた口を逆に吊り上げ、楽しそうに笑む影丸を睨む天。  
髪を梳かしていた櫛をリュックにしまい込み、天は影丸を正面から見た。

「此処の住人はねえ。天みたいな、力を欲する人を鍛えてくれるんだよ。」

「……なんですか、それは。」

怪訝な表情。天は、よくわからないと頭を振った。

「時々、気に食わないのか殺されちゃうお弟子さんもいるみたいだけれどね。天は余裕でOKされるから大丈夫だよ。」

「どこからその根拠が……。」

殺されちゃう、とふざけた口調で影丸がいった言葉に、天は心底嫌そうに顔をゆがめる。

弱音を吐くわけではないが、此処の住人には勝てる気がしなかった。くつくつと喉で笑う影丸。

天は、ぴくりと眉を震わせた。

「天、さっき、天に声をかけた子供がいたでしょう。」

「ああ、」

あの子か、と頷く。

他の子供と同じように、麻のような布で身体に引っ掛けるように服を着ている子供だ。

確か、髪の色は、くすんでいたが青かった気がする。

なかなか珍しい色だ。影丸と同じく。

影丸は、にやにやと企んだような笑みを浮かべ、天をじっと見つめる。

もったいぶっていないでさっさと見え、と、天はにらみつけた。

「あの子は、この町の長なんだ。」

「……は、」

一瞬。肩の力が抜けた。

「どういうことですか。」

信じられないのか、天は眉を寄せたままそう問う。

だが、影丸はそんなことは気にせずにくつくつ笑った。

「まずはその話より、僕たちの話をしようか。」

「……。」

影丸のその返答に、つい黙る天。

話を変えるのならば、今はまだその質問はできない。

不機嫌そうに口を尖らせる天に、楽しそうだった笑みは少し消え、代わりに困ったような笑みが影丸に浮かんだ。

「僕たちは、オガーデリックという力を使う。それは、電車で話したから知っているよね？」

頷く天。影丸は、それに答えるように頷いて話を進めた。

「オガーデリックは、自身の力を元とする力。でも、世界に存在する特別な力には、もう一つの種類が有るんだ。」

ぴん、と人差し指をたてる。

無意識に、その先端に目をやる天。

血色の良い指の先から、整えられた爪が少しだけ覗いていた。

「デルーストーム。周りの力を元とする力のことを指す。僕たちとは逆の位置にいるため、オガーデリックを使う人間とデルーストームを使う人間は反発しあう。今も、それは変わらないよ。」

もう片方の手の人差し指もたてる。

それらを近づけ、軽くぶつけて離れさせる。

どうやらオガーデリックとデルーストームのことを表しているらしい。

天は、頷かずに話を進めるよう訴えた。

「で、僕たちが使うオガーデリックは、自分の隠れた力を表に引っ張り出さなくてはいけないから、此処を利用するんだ。」

「・・・どうやって?」

曖昧な頷きを二三度繰り返し、口を開いた天。

影丸は、天の言葉に頷くと、先程のように口を開いた。

「気配を完全に消すこと。」

「。」

「此処の住人は、常人には到底気配を感じ取ることができないようになっている。気配を消すのが上手いからね。でも、僕のようなオガーデリック使いなら、それを察知できるようになるんだ。」

立てていた指を、他の指と一緒に握る。

それを自然に膝の上に置く影丸の動作を、意味もなく眺める。

影丸は続けた。

「それは、オガーデリックを引き出すことと同時に、オガーデリック

クを操ることに繋がるんだよ。わかった？」

「・・・はい。大体は。」

こくん。と頷く。

影丸は、よかったと息をついた。

「僕、説明するの苦手だからさ。まあでも、今日はまだそれはやらないから、明日に備えて早めに寝ようか。」

「はい。」

満足気な溜め息をつき、もぞもぞと毛布の中に潜り込む影丸。

天も、軽く返事をして毛布とシーツの中に滑り込んだ。

そこでふと、天は考える。

（お風呂には入れないのは分かった。でもせめて、着替えだけは・・・。）

「・・・師匠。」

「んー？なににー？」

「・・・明日、着替えをしたいのですが、どうしたらいいですか？」

「・・・じっちゃんに相談してみるよ。」

ついでにシャワーもね。

そう付け足した影丸に、天は気付かれないよう安堵の溜め息をついたのだった。

## 第七話（後書き）

補足

寂れた町：通称ゼーパルの町

由来：ゼーパルというオガーデリック使いが其処を見つけ、利用するようになったから。

説明：オガーデリック使いだけが利用する町。

ただ宿のために利用するものも居ない訳ではないが、ほとんどは天のように訓練する為。

カウンターの老人（名をモイスローという）が「5号室が開いている」といったのは、

その部屋しか綺麗にしていないという意味。

なので、あらかじめ開けておきたい場合は、きちんと予約をすることをおすすめします。

また、ゼーパルの町長である少年エヴノはゼーパルの町でも一番に気配を絶つのが上手らしい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2825h/>

---

オイタナジー

2010年11月16日10時38分発行